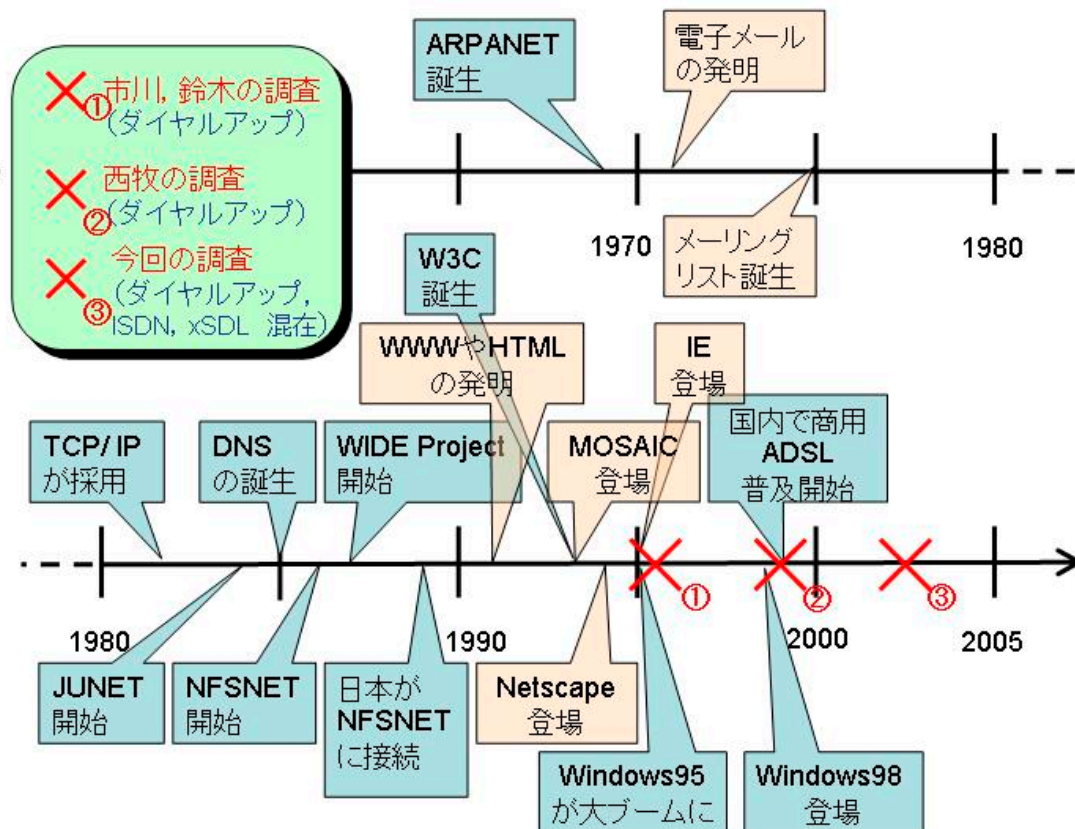


第2章 インターネットについて

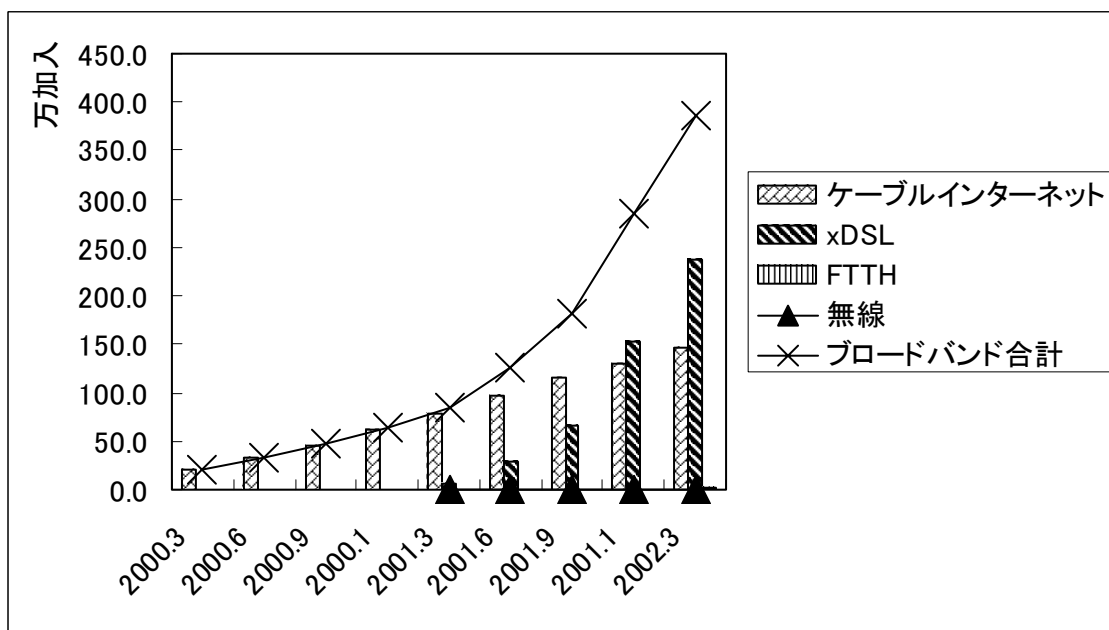
今やインターネットは世界中に広がり、我々の生活の中でたいへん重要な役割を果たしている。インターネットは1969年に米国で4台の計算機を接続して構築したネットワークがその起源だといわれているが、まだ誕生してから30年と少ししかたっていない。しかも、スイスのCERN（欧州合同素粒子原子核研究機構）でWWW（World Wide Web）やHTML（Hypertext Markup Language）が開発されたのは1990年代に入ってからで、Webページによる情報のやり取りが行われるようになったのはここ10年の間である。たった10年間であるが、ほかの分野とは比較にならないくらいの進歩、発展を遂げている。このような情報革命は一方で、情報格差（digital divide）という問題を生んだ。

市川らの調査は1995年から1996年に、西牧の調査は1999年に実施されている。市川らの調査時点は、Windows95が発売された直後であり、わが国におけるインターネットの教育目的の利用は黎明期にあったと考えられる。このころからWindows、インターネットということばが一般的に認知されはじめたのではないだろうか。西牧の調査時点は、ちょうどWindows98が発売された直後にあたり、一般的にもパーソナルコンピュータが普及しはじめた時期にあたる。本研究の調査は2002年から2003年の実施であるが、市川らの調査や、西牧の調査の時点と比較して、インターネットをとりまく環境がいくぶん成熟しつつあるといえる。日本のインターネット人口は今年2月末時点で5,645万3千人となっており（インターネット白書2003）、1世帯に1人以上インターネット利用者がいる割合を示す世帯普及率でも73.0%に達している。また、xDSLやFTTHなどを利用しているブロードバンド利用者は、全インターネット利用世帯中占める割合について1年間で18.5%から39.3%まで増加している。このことはインターネットを流通する情報の質的な変化を意味している。

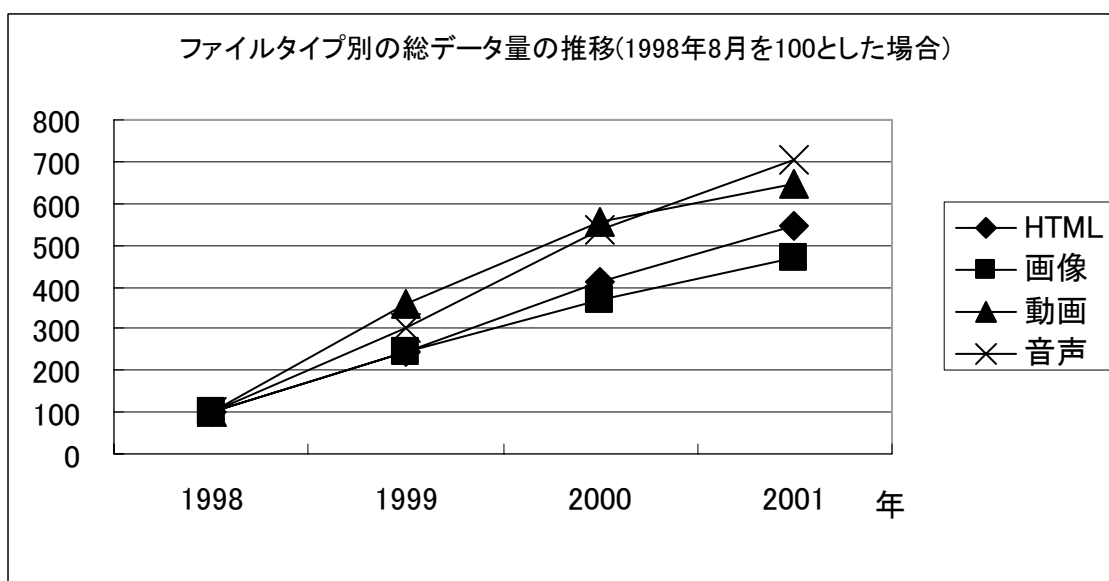


(図1 インターネットの歴史とWWWの調査)

2000年1月の時点でWebページを公開している国内の小・中・高等学校，盲・聾・養護学校のうち61%がダイヤルアップ接続であり，35%が常時接続であった．すなわち，市川らの95-96年，西牧の99年の調査の時点ではこれら学校のインターネット接続の手段はほぼすべてダイヤルアップであったと考えられる．西牧の99年の調査の時点では，一般にはNTTが用意した「テレほーだい」という，23時から翌8時まで定額で回線が利用できるという料金設定が普及した．「テレほーだい」は定額制であるが，常時接続ではなく，この後登場する常時接続ISDNまでの過渡期を担う接続形態だったといえる．それに対して，今回の調査の時点ではまだダイヤルアップ接続がかなりの割合で残ってはいるものの，ISDNやxDSL等の常時接続が珍しくなくなっている．インターネットが誕生してからの発展の歴史の中で，3回にわたるWWWの調査がどのような背景の中で行われたのかを(図1)に示す．(図2)には，西牧の調査の後にブロードバンド接続が急速に普及していく様子を，(図3)にインターネット上のファイルタイプ別のファイル数とデータ量の推移を示す[9]．ネットワークが急速に大容量化するに伴って，HTMLのファイル数よりも動画や音声のいわゆるマルチメディア関係のファイル数の増加率が上回っていることが見て取れる．



(図 2) ブロードバンド接続の急速な増加 [9]



(図 3) インターネット上に占めるファイルの種類ごとの増加 [9]